

1. 前回の内容のまとめ

■第1章

生産の集積に伴い、資本は、競争段階⇒独占段階へと至る(独占体が形成される)。

■第2章

銀行の発達に伴い、銀行は、多数の控え目な仲介者⇒一握りの独占者に(銀行が産業をも支配)。

2. 第3章および第4章の概要

(引用文は、国民文庫版(大月書店)によります。)

■第3章「金融資本と金融寡頭制」

●金融資本とは？

○ヒルファディングの定義

「金融資本とは、銀行の管理下にあつて産業家によって充用される資本である。」

○レーニンの定義

「生産の集積、それから成長してくる独占体、銀行と産業の融合あるいは癒着、——これが金融資本の発生史であり、金融資本の概念の内容である。」

●資本の参与による株式会社の支配

○ハイマンの記述より

「指導者は親会社…を統制し、親会社はさらに、それに依存する会社(『子会社』)を支配し、子会社は『孫会社』を支配する、等々。こうして、あまり大きくない資本でもって、巨大な生産諸部門を支配することができる」

○株式所有の「民主化」とは？

「実際には、経験がしめしているとおおり、株式会社の事業を切り盛りするためには株式の四〇%をもっていれば十分である」

⇒「なぜなら、ばらばらな小株主の一定部分は、実際には、株主総会に出席したりすることなどがけつてできないから」

⇒「株式所有の『民主化』は、実際には、金融寡頭制の威力を増大させる一つの方法なのである。」

●資本参与の持つその他の役割と、貸借対照表の利用

○責任逃れの手段としての役割

「親会社」の指導者→法律上は、「子会社」に対してなんの責任も負わない。

法的には責任を負わずに、実際には子会社を通じて何でもできる。

⇒「貸借対照表作成の最新技術」と相まって、独占資本家は、リスクを負わずに何でもできる。

(失敗した場合には、保有する株式を売却してしまえば、自らは被害を免れうる。)

⇒さらに、貸借対照表を理解しにくくする手段として、子会社の設立などにより、単一の経営をいくつかに分割する手法が用いられる。

●金融寡頭制の支配の手法

「金融資本は、会社の創立、有価証券の発行、国債、等々から、巨額の、しかもますます増大する利潤を引きだし、金融寡頭制の支配をうちかため」る。

「金融資本の主要な業務の一つである有価証券発行のもつ異常に高い収益性は、金融寡頭制の発展と強化において非常に重大な役割を演じる。」

●金融寡頭制の実態とは？

○ロシア

E・アガードの資料によれば、ロシアの大銀行の「稼働」資本のうち、4分の3以上は、ドイツ・イギリス・フランスの銀行からの資本である。さらに、ペテルブルグの大銀行の機能資本の4割以上は、石炭、製鉄、石油業、冶金業、セメント工業のシンジケートの手にあり、銀行資本と産業資本の融合が進んでいる。

○アメリカ

砂糖トラストの例。1887年から1907年までの22年間で、資本は10倍以上になった。

○フランス

4つの巨大銀行が、「大銀行のトラスト」を形成し、証券発行による独占利潤などを確保。露清公債、ロシア公債、モロッコ公債などから、借款の各10%程度が銀行の利潤に。「フランス人はヨーロッパの高利貸である」。

⇒リジス(仏のジャーナリスト)「フランス共和国は金融君主国である」「金融寡頭制が完全に支配しており、それは新聞をも政府をも支配している」

●不況期における銀行の「活躍」

○不況期における銀行

「不況期には、小さくて堅実でない企業はたおれるのに、大銀行は、それらの安値買収とか、あるいは儲けの多い『整理』や『再建』に『参与』する。

○ヒルファディングによれば…

整理や再建は銀行にとって、①有利な事業、②こうした会社を自分に従属させる好機

●大銀行による大都市近郊での土地投機

交通機関(鉄道の建設など)も、銀行の支配下にある大会社の手中にある。

⇒したがって、地価の変動も大銀行の手中にある(鉄道を通せば、地価は高騰する)。

⇒大銀行は、土地投機により利益を得ることができる。

●まとめ

- 「独占は、ひとたび形成されて幾十億の金を運用するようになると、絶対的な不可避性をもって、政治機構やその他のどんな『細目』にもかかわりなく、社会生活のあらゆる面に浸みこんでゆく。」
- 「資本の所有と資本の生産への投下との分離、貨幣資本と産業資本あるいは生産的資本との分離、貨幣資本からの収入だけで暮らしている金利生活者と、企業家および資本の運用に直接たずさわるすべての人々との分離——これは資本主義一般に固有のことである。」
- 「帝国主義とは、あるいは金融資本の支配とは、この分離が巨大な規模に達している、資本主義の最高の段階のことである。」
- 「金融資本が他のすべての形態の資本に優越することは、金利生活者と金融寡頭制が支配的地位にあることを意味し、金融上の『力』をもつ少数の国家が他のすべての国家からぬきでることを意味する。」
- 「(イギリス・アメリカ合衆国・フランス・ドイツ以外の)残りの世界のほとんどすべては、なんらかの形でこれらの国々の——国際的銀行家の、世界金融資本のこれら四本の「柱」の——債務者および貢納者の役割を演じている。」

■第4章「資本の輸出」

●「商品の輸出」から「資本の輸出」へ

○イギリスの例

かつては「世界の工場」⇒この地位は、19世紀の最後の四半世紀に損なわれた。

○20世紀にかけて、別の種類の独占の形成へ

(理由) ①先進資本主義の各国における資本家の独占団体の形成

②資本の蓄積が巨大な規模に達した少数の国々の独占的地位の形成

⇒先進国における、巨額の「資本の過剰」の形成

○資本輸出の可能性と必然性

「可能性」→鉄道の建設などによる、後進諸国が世界資本主義体制に引き入れられる条件の形成

「必然性」→先進資本主義国の「爛熟」による、資本の有利な投下 部面の不足

⇒「過剰な資本は…資本を外国に、後進諸国に輸出することによって、利潤を高めることにもちいられるのである。これら後進諸国では利潤が高いのが普通である。なぜなら、そこでは資本が少なく、地価は比較的安く、賃金は低く、原料は安いからである。」

●資本輸出の発展の実態

20世紀初頭に、資本輸出は大きな発展を遂げた。

○イギリス

⇒アジア、アメリカ大陸などの植民地領土へ

○フランス

ロシアを中心とするヨーロッパへ

○ドイツ

ヨーロッパとアメリカ大陸に均等に

●資本輸出の諸手段

○借款の供与

借款の一部を、債権国の生産物の購入に支出することを条件づける。

○銀行の設立

植民地に対して、銀行とその支店を設立し、金融資本の網の目を張りめぐらせる。

以 上

■参考

※社団法人「日本土木工業協会」ウェブサイト内の

<http://www.nikkenren.com/doboku/ce/kikanshi0106/cover.htm>

より引用(下線は引用者による)。

阪急電鉄の創始者として知られる小林一三(一八七三～一九五七)は、実にアイデア豊かな事業家であった。鉄道の経営をはじめとして、沿線一帯の先進的な住宅地開発、宝塚歌劇や東宝に代表される大衆娯楽の創造、日本初のターミナルデパートや近代的大衆ホテルの建設。東京電燈(現東京電力)の経営を立て直し、第二次近衛内閣の商工大臣に任命され、敗戦直後には戦災復興院の総裁を務めた。偉大な事業家として神格化する人もいれば、都市におけるライフスタイルの原型を創った文化クリエイターである、と評する人もいる。日本の社会基盤の近代化に関わった多くの人物の中でも、ひときわ異彩を放つ存在である。

もともと小林は、事業家を志していたわけではない。明治二十五年に十九歳で慶應義塾を卒業、小説家にあこがれて新聞社を目指したものの就職の機会を得ず、仕方なく三井銀行に入社する。以後十三年間、特に出世することもなく、夜遊びに興じていたらしい。

転機が訪れたのは明治四十年、三十四歳の時のことで、ちょうど三井銀行を辞して職のなかった小林に、大阪の箕面有馬電気軌道株式会社(のちの阪急電鉄)創立の発起人に加わってほしいという話が舞い込む。早速専務取締役の職に就いた小林は、沿線住宅地開発と旅客輸送をセットにして鉄道経営を行うという当時は画期的なアイデアによって、深刻な不況下にあつて誰もが失敗を確実視していた箕面有馬電軌の経営を、軌道にのせていくのである。さらに、宝塚に新しい温泉と遊園地、宝塚少女歌劇を発足させ、梅田駅には日本初のターミナルデパートを開業する。つまり、郊外に住んで毎日電車で都心に通勤、駅のデパートで日用品の買い物をし、休日は家族で行楽地に遊ぶという、現在も東京や大阪に一般的な私鉄沿線郊外的生活スタイルは、この時小林が創出したものである。(後略)